

令和7年度 奈良市立佐保幼稚園 研究実践概要

園長名 坂上 紀子

全園児数 11名

1. 研究主題

豊かな体験活動を通して、幼児の主体性を育てる
—複式学級で過ごす中で—

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

核家族化や地域のつながりの減少から幼児の人や環境に関わる力が弱くなっている現状を受け、「幼児の主体性を育てるための豊かな体験活動とはなにか」について職員間で検討をしていくことが重要であると考えた。今年度は初めての複式学級での運営であり、異年齢が同じクラスで過ごす中で学びや気づきが子ども達にどのような影響を与えるのかを研究主題として設定した。

また、本園の豊かな自然環境にも着目し、幼児が信頼できる保育者と関わり、安心して園生活を送り友達と一緒に過ごす中で、自ら感じ考えながら遊び、発達に必要な経験を積み重ねることが出来るよう少人数の良さを生かして幼児の資質・能力を豊かに育てていけるような保育の工夫について考えていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・異年齢、少人数の良さを生かす為に、職員間で日々の保育の反省、情報交換や園内研修を通じて、各年齢の発達に応じた環境構成、援助の在り方を探る。
- ・身近な自然環境に興味・関心をもって関わる中で、心を動かす体験や夢中になって遊ぶ経験を重ね、意欲的・主体的に活動する幼児を育てる。

②研究の重点

- ・幼児が複式学級の中で異年齢や同年齢の友達と関わりの中で夢中になって遊ぶ姿を捉え、その要因となった援助や環境構成を検討する。
- ・「奈良市こども園カリキュラム」を活用し、幼児の発達に沿った主体性につながる姿を捉え、援助や環境構成の工夫を実践・分析する。

③活動の方法

事例1 【4、5歳児】 『染色ってすごいな～』

4～9月 マリーゴールドを育てよう

毎年、5歳児がマリーゴールドを栽培し、染色体験を行っている。今年度は、複式学級なので、4・5歳児一緒に取り組むことにした。

4月に種から育てた苗を、5月に地域の方と一緒に花壇に植えた。優しく声をかけてくださる地域の方との関わりに、自然と笑顔になる子ども達の様子があった。

「水をあげると元気になるよ」「早く大きくなってほしいな」と、5歳児が毎日の水やりに一生涯懸命に取り組む姿から4歳児も刺激を受け、「僕が植えたやつ、大きくなってきた」「お水たくさんあげた！」と、生長する様子を楽しみに世話をしてきた。水やりをするためにタライに貯めた水が減ると、最後まで使い切れるようにタライを持ち上げて傾ける保育者の姿を見ていた5歳児が真似ると、翌日には4歳児も真似るなど、4歳児は5歳児と同じようにしたい思いが見られる。

染色に使うマリーゴールドの花弁は、染める物の4倍の量が必要であることを知らせると、「えー!」「めっちゃたくさんやん」と、驚く子ども達。花が咲くと摘み、体験に向けて冷凍や乾燥保存して花弁を溜めることにした。また、普段の遊びにも使えるようにしたことで、色水づくりや色の泡づくり、ケーキやジュースの飾りつけなど、存分に楽しんだ。「この花、めっちゃ大きい」「蕾って、トウモロコシみたい」「マリーゴールドで、オレンジ色のジュースができる」「いい匂い」と、実際に触れることで気づき、興味を深めていった。5歳児が花の摘み方や色水の作り方を「やって見せるね」と見本を見せたり、「花だけを引っ張ると、茎が折れちゃうよ」などと、4歳児に優しく方法を知らせたりする姿もあった。

夏休みには、関心が持続して欲しい願いから栽培物の様子をHPで発信した。また9月には保護者も一緒に花摘みをする機会をつくったことで、保護者から「染色体験、楽しみです」「どんな風にできるかわくわくしますね」などの声が聞かれるようになった。

9月 Tシャツを染めよう ～染色体験～

保育参観の時に親子で染色するTシャツにビー玉や割り箸を輪ゴムで止めて模様ができるように準備した。「どんな模様ができるかな」「早く染めたいね」と、親子で楽しみにする姿があった。4歳児は、輪ゴムで止めることが少し難しい様子もあったが、保護者と一緒にしたことで、安心して取り組むことができた。

染色の準備としてマリーゴールドの花を、ネットに入れる際には、友達が入れやすいようにネットを広げ、5歳児が4歳児に「もう少し入れられるよ」と、手助けする姿があった。

染色体験当日、花を煮込んで染色液をつくっている鍋を、保育者と一緒にそっと覗くと「茶色や!カレーみたい」「何か匂いもする」「熱いな…染めるのって大変やな」と、驚く姿があった。できた染色液に濡らしたTシャツを15分入れて染めた。

保育者が「魔法の液をつくるよ」と、ミョウバンを水に混ぜてつくった媒染液に興味深々の子ども達。Tシャツを染色液から取り出し、水洗いした後に媒染液に浸け、5分ほどお箸で揺らした。色が鮮やかに変化する様子に、5歳児は「わぁ～綺麗」「色が濃くなった!」とビックリ。その様子を見ていた4歳児も、自分の番が来ると「本当だ!」「黄色くなった」と喜んでいて。再び、染色液につけて出来上がった。

輪ゴムを外すのは、「固い!」「難しいな」と言う姿もあったが、保育者も手伝いながら外

すことができると、「白く見えてきた」「わあ！！模様ができて
る」「染色、楽しいな」と喜び、「〇〇ちゃんの可愛いね」「こ
の模様、どうやってしたん？」と、互いに認め合う姿があった。



(反省・評価)

異年齢で一緒に活動したことで、栽培活動や染色体験では、5歳児が率先して取り組んだり、気付いたことを言葉にして表現したり、4歳児に優しく手助けする姿があった。4歳児は、そんな5歳児の姿が身近にあったことで、5歳児の気付きをきっかけに、やってみたいと心を動かされたり、興味をもったりする姿が多く見られ、5歳児に対して憧れの気持ちが大きくなってきている。また、地域の方や保護者を巻き込んで取り組んだことも、豊かな体験活動に繋がった。

事例2 【4、5歳児】 11月 『クジャクをつくりたい』

遠足前に保育者が、ニフレルの生き物に興味を持てるように写真で紹介した。その中で「かっこいいな」「羽が綺麗」と、クジャクに興味を持ち、作品展で「クジャクをつくりたい」という意見が出て、みんなが賛成した。

「羽は、どうやってつくる?」「少し三角みたいな形」「黄緑と黄色と…」と、本物のようにつくりたい子ども達。その思いを受け止め、みんなの意見を全員がわかるように三角の画用紙を見せながら“どうしたら本物のような羽ができるのか”を、クラスで話し合った。5歳児が、「周りを細く切ったら良いと思う」「良いやん！細かくたくさん切ったら羽みたいになりそう」「切ったところを、こんな風に折ったら本物みたい」と、言葉や実際にやって見せるなどしている様子に、4歳児は賛成したり、「切った間を空けたらいい」などと話したりする姿があった。どの意見も認め合い、この中で好きな方法でつくることになった。

【製作する日】

羽がたくさん必要という子ども達の意見から5歳児が顔や体を製作している間に、4歳児が羽づくりを始めることになった。4歳児は、「任せて！めっちゃつくるわ」「たくさんつくるね」と、任されたことが嬉しく、張り切って取り組むことができた。5歳児は、4歳児の様子を見に行ったり声をかけたりしながら、「頭の上が可愛いかった」「足は、細いで」と、特徴を意識して顔や体を共同製作した後、羽づくりをした。できた顔や体を見た4歳児は、「本物みたいですごいな!!」「黄色チームさんってすごいね」と話していた。黒の大きな画用紙に細かい羽を歯ブラシや箸ペンで描き、つくった羽を貼っていくと、「本物みたい!」「めっちゃ良いやん」と、手を叩いたり、飛び跳ねたりして喜んだ。



(反省・評価)

例年共同製作は、発達段階を踏まえ、5歳児が行っている。複式学級の良さを活かし、5歳児が友達と話し合い、協力して製作に取り組む姿を4歳児が側で見られるようになってきたことで、憧れ、興味をもつことに繋がった。共同製作の一部分を、4歳児、5歳児の発達を踏まえて、できる内容で分担したことで、クラスみんなで1つのものをつくる達成感を味わうことができた。

5. 研究の成果

子どもが主体的に遊ぶために保育者は発達段階を捉え、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、面白いと感じたりしているのかを見取り、子どもを多面的に理解しながら思いに寄り添い、必要に応じてヒントや認める声かけ、見守りなどその年齢や場面、ねらいに沿った援助が必要であると感じた。

季節や子ども達の遊びの姿に合わせて環境を見直し、子ども達が身の回りにあるものを自由に使って遊べるように用意したことや、花植え、花壇の世話、畑の土づくりなど子ども自ら関わり、保育者と一緒に行ってきたことで、身近な環境との結びつきを感じながら関心を深め、様々なものの特性に気付く姿や試行錯誤する姿に繋がっていったと考える。

今年度初めての複式学級及び少人数学級の運営の中で、指導や援助の仕方でも難しさや戸惑いを感じることはあったが、職員で話し合いを重ね、一人一人丁寧に向き合える少人数の良さを生かし集団づくりを行った。子ども達が少人数、複式学級の中で同じ仲間として異年齢が関わる時間が増え、関係が親密で安定し互いを気に掛ける関係が生まれた。

また、様々な人や出来事との出会いを増やして欲しいという願いから、近隣のこども園や小学校、地域の人との交流の機会をつくり、多様な体験が出来る工夫をした。子ども達が様々な交流の場で経験し学んでいることが、新たな関わりを広げるきっかけづくりになった。

6. 今後の課題

来年度には、園児数の減少はさらに拍車がかかり少人数、単学年での運営が予想される。関係がより狭く保育者との関わりも介入しすぎたり、より援助を求めたりする中で集団や協同する機会が減少するかもしれない。そのことを意識しながら子ども一人一人とクラス集団として相互に育ち合う援助と指導の仕方を工夫していく必要がある。関係や役割が固定しすぎないように一緒に考え「どうしてか」「どうしたいか」等を言葉で伝え合えるようにしながら柔軟に対応し、少人数でも集団の一人として友達や他者に配慮し、みんながより楽しく遊べるように自分事として捉えられる経験ができるようにしていきたい。

また本園の自然環境を活用し、子ども達が季節の自然に触れながらその特徴や変化の様子に気付き、興味をもって更に「こうしたい」「こうなるかも」という思いに向かって友達と試行錯誤出来る姿に繋がるような環境を計画し、引き継いでいけるようにすることが必要である。

幼児の姿を、「奈良市こども園カリキュラム」や「幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿」などの視点から読み解き、「育成を目指す資質・能力の3つの柱」を踏まえつつ、幼児理解を深めていくことが求められる。一人一人の興味関心を把握しながら、子どもの心を動かし「もっとやってみたい」と幼児が能動的に身近な環境に関わり、豊かな体験活動につながるような保育内容の創造に努めていく。